東京で見つけた『兵庫の地名』

懐かしさを誘う郷土の響き
時代を超えて土地に伝わる

地名はその土地土地で名をはせた人物やそこに存在した事物、形状的な特長などに由来していることが多い。まさに歴史的な意味を現代に伝える証文と言える。そんな地名は、何も一つの地域特有のものではない。同じ地名が全国の複数の場所で見られるケースは珍しくはない。東京を歩いていても、しばしば兵庫と同じ地名を見かける。どんなつながりがあるのだろうか。それとも何のゆかりもないのだろうか。想像を膨らませれば二つの土地がぐっと身近なものに感じる。大都市・東京で親しまれている兵庫と同名の地名の謎を、いくつか探ってみることにした。

（神戸新聞東京支社編集部長　東方利之）

青山通り

徳川家臣・青山家の屋敷
篠山藩主として維新迎える

東京都港区の青山と言えば、高級ブティックや世界のブランドショップが軒を連ねるハイセンスな街並みとして知られる。ここを東西方向に貫くのが、日本の政治の中心地である永田町から若者の街、渋谷へと至る国道246号。1964年の東京五輪に合わせて整備された幹線道路は、通称「青山通り」として首都の発展を支えてきた。路線の西方、渋谷にほど近い地点にはケヤキ並木が美しく、明治神宮へと続く表参道の交差点がある。

表参道と交わる青山通り

青山の地名は、江戸時代、徳川家康の家臣だった青山家の下屋敷があったことに由来している。青山家は藤原氏の血筋を引いているとされ、上野国吾妻郡青山郷（現・群馬県吾妻郡中之条町）に下って「青山」の姓を名乗ったのが始まりという。三河国に転じて青山忠成が家康に仕えるようになり、譜代大名として江戸幕府に重用された。常陸国や信濃国などを治め、1748（寛延元）年、丹波国亀山から丹波国篠山藩に移封。長年にわたって老中や大坂城代などの要職を担った。

分家に当たる青山家の菩提寺「梅窓院」

青山家は明治維新を迎えるまでの100年余、6代にわたって篠山藩主を務めた。歴代藩主は藩校「振徳堂」を開くなど教育や文化に力を入れ、維新後の1876（明治9）年には青山家の21代当主、青山忠誠（ただしげ）が、県立篠山鳳鳴高校のルーツとなる「私立篠山中年学舎」を開いた。同高校には青山家に伝わる和漢書を収めた「青山記念文庫」が設けられているほか、青山家の別邸は市立青山歴史村として保存されている。その功績から、青山家は今でも丹波地域で「青山のお殿様」と呼ばれて親しまれている。

青山家の菩提寺は、丹波篠山市内にある「蟠龍庵（はんりょあん）」が知られるが、青山通りと外苑通りの交差点近くに浄土宗の寺院「梅窓院」がある。ここは美濃国郡上藩を治めた分家筋に当たる青山家の菩提寺として、1643（寛永20）年に建立された。江戸時代、その権勢を揺るぎないものとし、宗家、分家ともに幕臣として仕えた青山家。その名跡は時代と地域を超えて今も受け継がれている。

梅窓院にある青山家当主の墓所

播磨坂

府中藩主・松平播磨守の屋敷
兵庫の播磨とは無縁

日本を代表する学問の府である東京大学や菅原道真をまつった湯島天神があり、教育の街として知られる東京都の文京区。ここに兵庫の旧五国の一つ「播磨」の名が付いた地名がある。

「播磨坂（はりまざか）」。東京メトロの茗荷谷駅すぐの所にあり、東

西約400メートルにわたって続く緩やかな坂道だ。現地に設置されている文京区教育委員会の説明によると、この辺りには常陸国の府中藩主・松平播磨守の広大な上屋敷があった。坂の下の低地一帯は「播磨たんぼ」と言い伝えられ、この坂道が播磨坂と呼ばれるようになったという。

現在の道路は、終戦後の区画整理によって整備され、環三道路（環状3号線）と呼ばれている。1960（昭和35）年頃、文京区を花でいっぱいにする運動が進められ、播磨坂には道の両側と中央の歩道に樹齢15年程度の桜の木が約130本植えられた。地元住民の手によって「環三のグリーンベルト」として丹念に育てられた。1968（昭和43）年から毎年、桜祭りが開かれ、文京区の新名所となっている。今年は新型コロナウイルス感染症の影響で祭りは見送られたが、例年と変わらず、桜のトンネルで散策を楽しむ人たちや先生に引率された園児らの笑顔がみられた。

毎年、桜祭りが開かれる播磨坂の桜並木

美しい桜並木は交差点の名称にもなっている

文京区のコミュニティーバスの停留所

春日通り

丹波出身の春日局が居住 波瀾万丈、女性の頂点に

播磨坂と交差して太い道路が東西方向に走っている。東京都豊島区の池袋から墨田区の本所までをつなぐ幹線道路は、通称「春日通り」と呼ばれている。播磨坂と接するT字路を起点に南東に20分ほど歩くと、大きな五差路の交差点に行き当たる。交差点の名称は「春日町」。かつてこの一帯は、江戸幕府の3代将軍徳川家光の乳母となり、後に大奥を取り仕切った春日局の屋敷があったことから「春日殿町（とのまち）」と呼ばれていた。「春日」の名称は、その名残を今に伝えている。

春日局の生誕地は、現在の丹波市春日町黒井。明智光秀の家臣斎藤利三の娘として、丹波国の黒井城の下館だった興禅寺で生まれた。幼名は福。興禅寺には福が産湯につかったとされる井戸や腰をかけて遊んだとされる石が残されている。1989年にはNHK大河ドラマで「春日局」が取り上げられ、多くの歴史ファンが生まれ故郷を訪れた。地元では今でも春日局や黒井城にちなんだイベントが開かれている。

春日局は春日通り沿い

春日通りの道路標識

文京区役所前の交差点

にある麟祥院に眠る。家光が春日局の法名をもって改号したとされ、墓所や像、肖像画が残されている。墓石には四方に穴が開けられており、これは「死して後も天下の政道を見守り之を直していかれるよう黄泉から見通せる墓を作ってほしい」との遺言に沿ったという。

菩提寺の麟祥院にある春日局像

　「春日町」の交差点近くの住宅地に、赤い鳥居がひっそりと建っている。春日局の屋敷の鎮守として創建されたと伝わる。光秀とともに織田信長に弓を引いた逆賊の武将の家に生まれながら、後に女性の頂点ともいうべき立場に上り詰めた春日局にあやかり、「出世稲荷神社」と呼ばれるようになった。その前に立ち、波瀾（はらん）万丈の人生を送った丹波の強くて優しい女性を想像してみた。

春日局にあやかって命名された出世稲荷神社

兵庫横丁

神楽坂の小路 兵器庫に由来

おしゃれで粋な坂の街として外国人にも人気がある東京都新宿区の神楽坂エリア。明治時代後期から大正時代にかけて東京を代表する繁華街の一つとしてにぎわい、山手銀座と呼ばれるほどだった。メーンストリートの神楽坂通りには今風の飲食店などが並ぶが、一歩、路地に足を踏み入れると途端に昔にタイムスリップしたような情緒あふれる空気が流れる。東京でも有数の花街だったことをしのばせる料亭や石畳が、落ち着いた気持ちにさせてくれる。

　神楽坂の路地はまるで迷路のように何重にも張り巡らされており、ゆったりと散策や店探しを楽しむ人たちとすれ違う。路地には「―横丁」「―小路」などの名称が付けられているが、そのうちの一つに「兵庫横丁」がある。徳川家康の命によって創建されたとされる善国寺からみて、神楽坂通りを挟んだ反対側にある。黒板塀の料亭や石畳が花街の面影を残している。数ある路地の中でも最も古くからあったとされ、新宿区まちなみ景観賞を受賞したこともあるという。

石畳と黒塀が特徴の兵庫横丁

兵庫横丁には人がやっとすれ違える小路も

　兵庫県とは何かつながりがあるのだろうか。辞書で「兵庫」を引くと「兵器を納める倉」とある。「兵庫横丁」周辺は鎌倉時代からの古道が通り、軍事面の要衝だったという。戦国時代には牛込城の「兵器庫」があったことから「兵庫」の地名が付いたとされる。

　夏目漱石や泉鏡花ら文人や政財界の要人も好んだ神楽坂には「かくれんぼ横丁」との名が付いた路地もある。お忍びでやってきたので誰かに見つかっては困る。路地に入って身を隠したことからこの名称が付いたとか。見通しのきかない小路で歩を進めると、行く先の角から今にも誰かが出てきそうな気がしてきた。